羆熊通信

ペストの仮面

札幌市医師会手稲区支部広報部長
むらさき内科循環器クリニック　院長
村　崎　俊　之

書斎を掃除していたら、埃をかぶった奇妙なお面が出てきた。ゴミ箱に捨てようと思ったがふと手が止まった。これは10年以上前にイタリアの小さな雑貨屋で見つけたものだ。カラスの嘴に丸眼鏡をかけた白いお面。気味悪いものだったがなぜか気になった。妻の反対を押し切り購入し、日本に持ち帰った。

後に調べて分かったことだが、これはペストの仮面というものらしい。16世紀のベネチアでペストが蔓延した際、当時の医師達が使用したものだ。カラス状の嘴に薬草やアルコールを湿らせた綿を詰め込み、患者を診察した。長い嘴は患者との距離をとるための働きもある。それに丸眼鏡をかけ黒いマントを着て手にはステッキを持ち、患者の布団や衣服をそれでひっかけて診察したのだという。この衣装はフランスの医師シャルルドルムによって考案されもので、このようなペスト医師がこの時代活躍したのだそうだ。感染防止のための必死の様相だが、これで感染の予防ができると本気で信じていたのは、今考えるとこっけいな話だ。

しかし最近もこれに似た「ペスト医師」を目撃したような気がする。一昨年の新型インフルエンザ騒ぎの時だ。国を挙げて新型インフルエンザを国内に入れるなという水際作戦。マスクと帽子に青い防疫服を身にまとって、空港で動き回る姿はまるで中世の「ペスト医師」だった。

潜伏期間や不顕性感染を考えれば、この水際作戦がばかげたことだと分かりそうなものだが。そもそも水際対策に明らかな感染遅延効果はないとのevidenceもある。不勉強とパニックが「ペスト医師」を作り出す。evidenceがあるにもかかわらずそのような行動にいたるのは、むしろ当時のペスト医師よりこっけいだったかもしれない。

EBMの時代に医師となり、多くの医療行為が「ペストの仮面」になっていったのを経験した。私たちの経験や論理で正しいと考えてきた医療をEBMが検証し続けている。その検証によって、経験や論理が「ペストの仮面」になってしまうこともある。それは医学の進歩として喜ぶべきことだろう。

それだけに油断すると、いつでも自分が「ペスト医師」になる。今の自分の医療に自己反省がなく過信すると、知らぬ間に「ペスト医師」になってしまう。そうならないように日々勉強し、研鑽する必要があるのだとあらためて考えてしまった。

結局奇妙な仮面は捨てることができずにいる。今では書斎に鎮座し、しっかり勉強しろよと私を見守り続けている。

小樽　札幌　函館

札幌市医師会南区支部広報部長
札幌逓信病院内科主任医長
河原崎　　暢

今回、北海道医報に載せていただくこととなり、北海道に関して思いついたままのことを書かせていただきます。

函館出身の昭和に活躍された作家亀井勝一郎は、以前、当時の北海道の主要都市を文学的に、札幌のピューリタリズム、小樽のリアリズム、函館のロマンチシズムに分けて言ったそうである。明治の開拓時代の都市の特徴をそれぞれ言い表しているといっていいだろう。戦後からの札幌市の一極集中化に伴い、北海道の政治・経済・文化・教育のすべてが札幌に集中し、小樽、函館が以前の隆盛をほとんど失ってしまい、ただの観光都市として存続している平成の現在においては、むろん消滅してしまったきらいがある。しかし、やはりそれぞれの都市の精神的基盤として今でも残存していると考えられる。

昭和初期、函館・小樽・札幌の人口が約15万くらいで横並びの時、各都市がまだ個別の魅力ある特徴を持っていた頃の時代を回想してみようと思う。大正末期〜昭和初期の時代は、第一次世界大戦が終了し、戦場とならなかった日本が明治維新後最大の好景気を迎えた時代である。日本の資本主義が軽工業から重工業へ移行し、欧米の技術・文化・思想などを積極的に受け入れ、都市部に賃金労働者＝サラリーマンが形成され、大正デモクラシー、昭和モダンニズムと呼ばれる日本の民主主義が高揚を示した時代である。戦前は一般的に暗いイメージがあるが、北海道の農産物も、戦争で荒廃し食糧不足となったヨーロッパに高く取り引きされ未曾有の好景気に沸き、現在の北海道農業の基礎が出来上がった時代でもあった。

まず、小樽は当時、空知の炭鉱の幌内と鉄道で結ばれ、石炭の積み出し港として、そして海外貿易の中継地として北海道の雑穀の輸出を行い、名実とも